悩みと克服へ切実な願い

吃音問題の国際大会で論議

治療か、それとも生き方を変えるか――。十一日までの三日間、京都市の国立京都国際会館などで開かれた第一回吃（きつ）音問題研究国際大会（全国言友会連絡協議会など主催、朝日新聞厚生文化事業団など後援）のシンポジウムで、吃音をどう乗り越えるかについて熱心な意見がかわされた。原因がよくわからず、治療法も確立されていない吃音。「治る」という人がいる一方で「七、八歳以上でどもる人はほとんど治らない」との見解もある。一般には「たかが吃音」と見られる風潮が強いなか、シンポジウムでは、吃音者の深い悩みの声と克服への切実な願いが表明された。

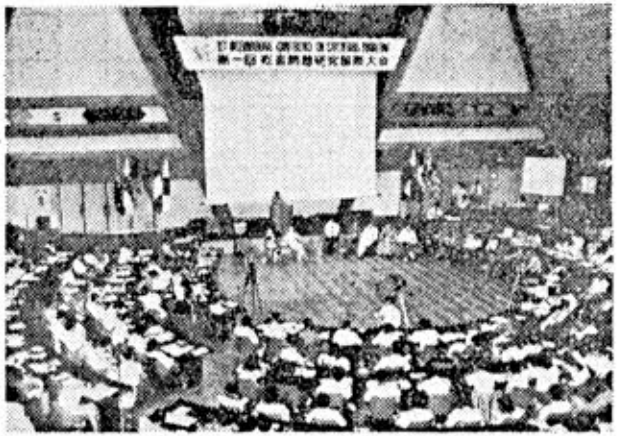
大会には吃音者、研究者、臨床家が、海外十一カ国から三十三人、国内から約四百人が参加した。大会の中心となるシンポジウムは十日「吃音児・者にとって吃音問題解決とは何かを考える」をテーマに開かれた。

成人で治るケースはほとんどないという立場から、まず、吃音者の自助団体、全国言友会連絡協議会の伊藤伸二会長が「治そうとすればするほど、吃音がいまわしくなり、それにこだわって消極的な逃げの人生を送る結果に陥りやすい。むしろ、治療を追求するのをやめ、どもりながらも積極的に生きるようにするべきだ」と発言。米国の言語病理学者ビビアン・シーアン女史も同じ立場から「吃音を隠そうとせず、どもってもいいから積極的にしゃべる態度を身につけること。世界が吃音者を受け入れるようになれば、吃音問題は消える。これは治癒ではなく克服」と述べた。

これに対して研究者らのグループ、日本吃音治療教育連盟の望月勝久事務局長は「治る人もいる。だから治療方法を追求したい」と、吃音対策の立ち遅れを指摘し、研究の基礎になる治療事例のデータ整備と、治療機関をもっと公立施設で拡充することを訴えた。

他の参加者の間でも「伊藤会長の考えを私の国でも広めたい」（オーストラリア）とする一方「吃音者であることを肯定したい人はそれでいい。しかし、治療も必要だ」（ポーランド）と両意見に分かれた。ただ、吃音者からは「恥ずかしがらずにしゃべることが大切なのはわかるが、非吃音者たちとしゃべると、ストレスがたまる。どれだけこれを続ければいいのか」（日本）「吃音を否定されると、全人格を否定されるように感じる。社会的に認められることを望む」（同）と、訴える声が出た。

吃音の発生率は人口の一％といわれる。吃音者は、例えば教師など、しゃべる職業をあきらめたり、職場での人間関係に悩んで転職したりすることが少なくない。日常生活でも、思うように商品名が言えないため買い物さえしづらい、という。吃音者自身にとっても、まだ受け入れ態勢の十分でない社会にとっても、問題解決への道のりは遠いことをシンポジウムは示していた。



吃音問題をめぐり、意見がかわされたシンポジウム＝京都市左京区の国立京都国際会館で